

1 奈良文書とは

- 平成6年、「世界文化遺産奈良コンファレンス」(奈良県奈良市)において採択された。
- 「文化と遺産の多様性」や「価値とオーセンティシティ」について、以下のような見解を示している。
 - ・文化遺産とその管理に対する責任は、第一にその文化を作り上げた文化圏に、次いでその文化を保管している文化圏に帰属する。(第8条)
 - ・オーセンティシティの審査は、固定された評価基準の枠内で成し得るものではなく、その遺産に固有な文化に根ざして考慮されるべきである。(第11条)
- 世界遺産条約の作業指針上、「世界文化遺産となる建築物の真実性を検討する際の実務的な基礎(practicalbasis)」とされている(作業指針第79条及びAnnex 4)。

2 記念会合開催までの経緯

- 平成24年11月 姫路会合(兵庫県姫路市)において、「姫路提言」を採択
奈良文書で提示された遺産、真実性並びに文化の多様性についてについて、さらに議論を深める必要性が示された。
- 平成25年8月、平成26年2月、準備会合(福岡県福岡市)において「奈良+20」の草案を作成
- 平成26年10月、奈良文書20周年記念会合(奈良県奈良市)において、「奈良+20」を採択

3 奈良文書20周年記念会合の概要

開催日: 平成26年10月22日～24日

会場: 奈良県新公会堂

参加者: 会議参加者38名(21か国)、その他オブザーバ参加者55名

主催: 文化庁、奈良県、奈良市

協力: (公財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所

4 議論等の概要

- 「奈良文書」に関し、当時、作成に関わった専門家の講演等により、作成経緯を振り返った。
- アフリカ、アラビア湾岸、ブータン、チリ、カナダ、スペインといった地域の文化遺産において、どのような現代的課題が発生しているかについてのケーススタディを行った。
- ケーススタディの結果を踏まえ、「奈良+20」文書が採択された。

5 奈良+20の概要

「奈良+20」では、遺産の保護に係る実践方法を改善するため、真実性の観点から優先的に検討しなければならない以下の5つの課題を提示した。

- 遺産プロセスの多様性
- 文化的価値が進化することの影響
- 多様な利害関係者を巻き込むこと
- 相反する要請と解釈
- 持続可能な開発における文化遺産の役割

6 本会合の成果

- 「奈良+20」の採択を通じて、「奈良文書」について、多くのケーススタディ等を踏まえ、その成果や課題等を整理することができ、これにより、「奈良文書」が今後も参照され続ける文書となった。
- 「奈良+20」を世界に向けて発信する道行きができた。
- 20年前に奈良文書が作成された場所で、世界各国から一線級の専門家を招聘し、会議を開催することで、文化遺産の分野において日本としての国際貢献ができた。

7 成果の発信

平成26年11月 イコモス総会(フィレンツェ)(青柳正規文化庁長官による報告)
同 年12月 イクロム文化財保存会議(コロンボ)(稲葉信子筑波大学大学院教授による報告)

奈良文書20周年記念会合
(2014年10月22日(水)～25日(土) 奈良)

主催 文化庁 奈良県 奈良市
協力 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所
(ACCU 奈良)

2014年(平成26年)は、1994年(平成6年)に「真実性に関する奈良文書」(以下「奈良文書」という)が採択されてから20年目の節目の年にあたる。

「奈良文書」は、文化遺産の「真実性」の審査はその遺産に固有な文化に根ざして考慮されるべきとの見解を示し、文化と遺産の多様性を尊重する国際宣言となった。

これにより、過去20年間、西洋中心の「石の文化」以外の世界遺産登録が進んだが、年月が経過する中で、新たな観点を考慮する必要性が生じている。

そこで、「奈良文書」の採択20周年を記念して、世界各国から文化財保護にかかわる第一線の専門家を招へいし、国際会合を開催する。同会合では、奈良文書作成の経緯やその意義を振り返るとともに、今後、文化遺産の「真実性」を検討するにあたってさらに必要となる事項を議論し、その成果をとりまとめ、広く発信する。もって、文化遺産に対する我が国の国際貢献とする。

10月22日(水)

9:00～9:15 開会挨拶

齊藤 孝正 文化庁文化財部文化財鑑査官

野村 政樹 奈良県地域振興部長

仲川 げん 奈良市長

9:15～9:45 講演

「重層的遺産としての奈良」

増井 正哉 奈良女子大学教授

10:00～13:00 講演

「文化財保存における「奈良文書」の重要性」

ユッカ ヨキレート イクロム事務局長付特別アドバイザー

「「奈良文書」の作成について」

クリスティーナ キヤメロン モントリオール大学教授

稲葉 信子 筑波大学大学院人間総合科学研究科世界遺産専攻長

「「姫路提言」と「奈良文書の採択20周年」

グスタボ アロウズ イコモス会長

14:30～15:50 総括的ケーススタディ

「奈良文書の精神—伊勢神宮の儀式と建築—」

千種 清美 ジャーナリスト

中川 武 早稲田大学教授

15:50～16:10 休憩

16:10～18:00 総括的ケーススタディ

「アフリカ文化と奈良文書及びNara+20—「カスビのブガンダ歴代国王の墓」と「ロベン島」—」

ウェバー ンドロ アフリカ世界遺産基金事務局長

ムワンジャ ナカール ローズ ウガンダ観光・野生生物・古遺物省長官

パスカル タルビンガ 世界遺産・ロビン島国立博物館チーフ歴史遺産オフィサー

10月23日(木)

9:00~9:30 個別ケーススタディ

「ケーススタディの準備について」

アンジェラ ラブラドル コーヘリット・アソシエイツ・パートナー

マサチューセッツ大学アムハースト校非常勤講師

9:30~11:00 ケーススタディ1

「遺産保護プロセスの多様性ー都市保全、アラビア湾の場合ー」

コーネリアス ホルトルフ リニース大学教授

グスタボ アロウズ イコモス会長

稲葉 信子 筑波大学大学院人間総合科学研究科世界遺産専攻長

ウェバー ンドロ アフリカ世界遺産基金事務局長

エマン アッシー ドバイ市庁文化歴史遺産エキスパート

ラシャード モハマッド ブハシュ ドバイ市庁建築遺産部長

アイリン オルバスリ オックスフォード大学 リーダー・文化遺産ツーリズムコンサルタント

11:00~11:30 休憩

11:30~13:00 ケーススタディ2

「変容する価値、遺産実践及び真正性ー仏教寺院及びブータンのゾン(城塞建築)の場合ー」

ガミーニ ウェジェスリア イクロム史跡ユニットプロジェクトマネージャー

マルタ・デ・ラ・トーレ ヘリテージコンサルタント

藤岡 麻理子 政策研究大学院大学政策研究科文化政策プログラム研究助手

河野 俊行 九州大学主幹教授

イェシー サムドラップ ブータン王国内務文化省文化局建築遺産保護課技術職員

向井 純子 ブータン王国内務文化省文化局建築遺産保護課主任技術職員

14:30~16:00 ケーススタディ3

「多様な利害ーハンバーストーンとサンタ・ラウラの硝石工場群の場合ー」

ケイト クラーク ウェールズ歴史環境保存部長

ホセ デ ノーデンフィクト チリ・ナショナルモニュメント・カウンシル事務局長

ドーソン ムンジェリ 駐ユネスコ ジンバブエ政府代表

マイケル ターナー ユネスコチェア(世界遺産センター所長代理)

ベザレル・芸術デザイン・アカデミー・都市デザイン保存学ユネスコチェア教授

モニカ バハモンデス チリ国立保存補修センターディレクター

16:00~16:30 休憩

16:30~18:00 ケーススタディ4

「錯綜する主張ーグラン＝プレの景観の場合ー」

ニール シルバーマン コーヘリット・アソシエイツ・パートナー

マサチューセッツ大学アムハースト校非常勤講師

クリスティーナ キャメロン モントリオール大学教授

クリストファ リベット イコモスカナダ科学委員会副委員長

レスター大学考古学&古代史学部名誉客員研究員

10月24日(金)

9:00~10:30 ケーススタディ5

「持続可能な開発—アニャーナのソルトバレーの場合—」

ルカ ザン ボローニャ大学教授

カロリーナ カステラノス イコモスワールドヘリテージアドバイザー

アンジェラ ラブラドール コーヘリット・アソシエイツ・パートナー

マサチューセッツ大学アムハースト校非常勤講師

マイケル ランダ イコモススペインパートナー

ナバラ大学建築学部、スペイン

10:30~10:45 休憩

10:45~12:45 全体討論

司会

河野 俊行 九州大学主幹教授

17:30~18:30 閉会セッション

「総括的報告」

アンジェラ ラブラドール コーヘリット・アソシエイツ・パートナー

マサチューセッツ大学アムハースト校非常勤講師

「NARA+20採択」

司会

西村 幸夫 東京大学先端科学技術研究センター所長

閉会挨拶

青柳 正規 文化庁長官

10月25日(土)

8:30~17:30 エクスカーション

慈光院(日本庭園)、法隆寺(西院伽藍・古材収蔵庫・東院伽藍)、飛鳥資料館、石舞台古墳

13:30~16:00 公開シンポジウム「世界文化遺産と古都・奈良～奈良文書の果たした役割～」

13:30~13:35 主催者挨拶

山下 和茂 文化庁文化財部文化財部長

13:35~14:15 基調講演

「現代社会と奈良文書」

グスタボ アロウズ イコモス会長

14:15~14:30 休憩

14:30~16:00 パネルディスカッション

コーディネータ

西村 幸夫 東京大学先端科学技術研究センター長

パネリストによる報告等(報告各10分、意見交換50分)

「奈良文書が世界遺産にもたらしたもの」

クリスティーナ キャメロン モントリオール大学教授

「奈良文書の我が国にとっての意義」

稲葉 信子 筑波大学大学院人間総合科学研究科世界遺産専攻長

「海外の事例紹介」

パスカル タルビンガ 世界遺産・ロビン島国立博物館チーフ歴史遺産オフィサー

「国際専門家会合の成果報告」

河野 俊行 九州大学主幹教授

意見交換

NARA + 20: ON HERITAGE PRACTICES, CULTURAL VALUES, AND THE CONCEPT OF AUTHENTICITY

Recalling the achievements of the 1994 Nara Document on Authenticity in setting principles of respect and tolerance for cultural and heritage diversity around the world, and in expanding the concepts of cultural value and authenticity in heritage practices;

Affirming the importance of community participation, social inclusion, sustainable practices and intergenerational responsibility in the conservation of heritage;

Recognizing present challenges to the conservation and appreciation of cultural heritage resulting from globalization, urbanization, demographic changes and new technologies;

Acknowledging the rights of communities to maintain and transmit their particular forms of tangible and intangible cultural expressions;

Building on international conventions and charters, and the work done in academic and professional fora since the drafting of the Nara Document that have helped to expand the scope of cultural heritage and underscore the importance of cultural context and cultural diversity;

The Agency for Cultural Affairs (Government of Japan), in celebrating the 20th anniversary of the Nara Document initiated a series of meetings of experts in cooperation with Kyushu University to evaluate and learn from the practical experiences of applying the Nara Document to the identification and management of heritage sites over the last 20 years. This Nara+20 text, building on the Himeji Recommendation identifies five key inter-related issues highlighting prioritized actions to be developed and expanded within global, national and local contexts by wider community and stakeholder involvement. These texts will be complemented by the proceedings of the 20th Anniversary of the Nara Document Meeting.

1. Diversity of heritage processes

Just as the Nara Document indicates that authenticity varies according to the cultural context, the concept of cultural heritage itself assumes diverse forms and processes. In the last 20 years, heritage management and conservation practices have increasingly taken into consideration the social processes by which cultural heritage is produced, used, interpreted and safeguarded. In addition, social processes and perceptions of authenticity have been affected by emerging modes and technologies for accessing and experiencing heritage.

Further work is needed on methodologies for assessing this broader spectrum of cultural forms and processes, and the dynamic interrelationship between tangible and intangible heritage.

2. Implications of the evolution of cultural values

The Nara Document acknowledges that cultural heritage undergoes a continuous process of evolution. In the last 20 years, recognition of this evolution has created challenges for heritage management and has led practitioners to question the validity of universal conservation principles. In addition, during this period, fruitful engagement by communities in heritage processes has given rise to the acceptance of new values that had previously gone unrecognized. These changes require that the identification of values and the determination of authenticity be based on periodic reviews that accommodate changes over time in perceptions and attitudes, rather than on a single assessment.

A better understanding is needed of the processes by which authenticity can be periodically assessed.

3. Involvement of multiple stakeholders

The Nara Document assigns responsibility for cultural heritage to specific communities that generated or cared for it. The experience of the last 20 years has demonstrated that cultural heritage may be significant in different ways to a broader range of communities and interest groups that now include virtual global communities that did not exist in 1994. This situation is further complicated by the recognition that individuals can be simultaneously members of more than one community and by the imbalance of power among stakeholders, often determined by heritage legislation, decision-making mechanisms, and economic interests. Those with authority to establish or recognize the significance, value, authenticity, treatment and use of heritage resources have the responsibility to involve all stakeholders in these processes, not forgetting those communities with little or no voice. Heritage professionals should engage in community matters that may affect heritage.

Further work is needed on methodologies to identify the rights, responsibilities, representatives, and levels of involvement of communities.

4. Conflicting claims and interpretations

The Nara Document calls for respect of cultural diversity in cases where cultural values appear to be in conflict. In the last 20 years it has become evident that competing values and meanings of heritage may lead to seemingly irreconcilable conflicts. To address such situations, credible and transparent processes are required to mediate heritage disputes. These processes would require that communities in conflict agree to participate in the conservation of the heritage, even when a shared understanding of its significance is unattainable.

Further work is needed on consensus-building methods to heritage practice.

5. Role of cultural heritage in sustainable development

The Nara Document does not specifically address issues of culture and development. Over the last 20 years, however, the need for considering cultural heritage in sustainable development and poverty reduction strategies has gained broad acceptance. The use of cultural heritage in development strategies must take into account cultural values, processes, community concerns, and administrative practices while ensuring equitable participation in socio-economic benefits. The trade-offs between conservation of cultural heritage and economic development must be seen as part of the notion of sustainability.

Further work is required to explore the role that cultural heritage can play in sustainable development, and to identify methods of assessing trade-offs and building synergies so that cultural values and community concerns are integrated in development processes.

For the purpose of this document, the following interpretations of key words were used:

Authenticity: A culturally contingent quality associated with a heritage place, practice, or object that conveys cultural value; is recognized as a meaningful expression of an evolving cultural tradition; and/or evokes among individuals the social and emotional resonance of group identity.

Conservation: All actions designed to understand a heritage property or element, know, reflect upon and communicate its history and meaning, facilitate its safeguard, and manage change in ways that will best sustain its heritage values for present and future generations.

Community: Any group sharing cultural or social characteristics, interests, and perceived continuity through time, and which distinguishes itself in some respect from other groups. Some of the characteristics, interests, needs and perceptions that define the distinctiveness of a community are directly linked to heritage.

Cultural values: The meanings, functions, or benefits ascribed by various communities to something they designate as heritage, and which create the cultural significance of a place or object.

Information sources: all physical, written, oral, and figurative sources that underlie the understanding and appreciation of the nature, specificities, meaning, and transmission of cultural heritage and the collective memory it embodies.

Stakeholder: A person, group or organization who has a particular interest in the heritage on the basis of special associations, meanings, and/or legal and economic interests, and who can affect, or be affected, by decisions regarding the heritage.

Nara+20 was drafted in English and adopted by the participants at the Meeting on the 20th Anniversary of the Nara Document on Authenticity, held at Nara, Japan, from 22-24 October 2014, at the invitation of the Agency for Cultural Affairs (Government of Japan), Nara Prefecture and Nara City.

(仮訳) 奈良+20
～遺産（保護）の実践、文化的価値及び真実性の概念～

世界中の文化や遺産の多様性への敬意と寛容の原則を示すとともに、遺産（保護）の実践の場における文化的価値と真実性の概念をより幅広いものとした「オーセンティシティに関する奈良ドキュメント」（1994年採択）の成果を想起し、

遺産保護における、コミュニティの参画、社会的包摂、持続可能な実践、世代を超えた責任の重要性を確認し、

グローバル化、都市化、人口構造の変化、新たなテクノロジーに起因する文化遺産の保護や理解にかかる現在の課題を認識し、

有形・無形の文化表現の独特の形を維持・継承するコミュニティの権利を認識し、

国際条約や憲章、そして、文化遺産の概念を広げたり、文化的な文脈や多様性の重要性を浮き彫りにした奈良文書の起草以来の学術的・専門的な議論を基礎とし、

文化庁（日本政府）は、奈良文書の採択20周年を記念して、過去20年間にわたり、遺産の特定と管理に奈良文書を適用してきた実地の経験を評価、活用するため、九州大学と共同で、一連の専門家会合を開催した。姫路提言を踏まえたこの「奈良+20」文書は、多様なコミュニティや関係者の参画により、国際情勢、各国内の情勢、地方情勢などに鑑みて優先すべき、今後発展、拡散していくであろう取組を浮き彫りにする5つの相互に関連する問題を明らかにしている。

これらの文書は、奈良文書20周年記念会合の資料により補完されることとなるだろう。

1 遺産プロセスの多様性

奈良文書が、真実性は、文化的背景に応じて異なると述べているように、文化遺産のコンセプト自体が、多様な形とプロセスを前提としている。過去20年間に、遺産の管理保全の実践において、文化遺産が作り出され、活用され、解釈され、守られてきた社会的プロセスを考慮するようになってきた。さらに、社会的なプロセスや真実性の認識が、遺産への新しいアクセスや体験のための方法や技術によって影響されている。

この、より幅広い文化の形やプロセス、そして有形遺産と無形遺産のダイナミックな相互関係を評価するための方法論に関して、さらなる検討が必要である。

2 文化的価値の進化の意味するもの

奈良文書は、文化遺産が継続的に進化の過程をたどることを認めている。過去20年間に、この進化への認識が遺産管理上の課題へとつながり、実務にあたる人々が普遍的な遺産保護の原則の有効性に疑問を抱くようになった。さらにこの間、コミュニティの遺産プロセスへの有益な関与により、以前は認識されなかったような新しい価値が受容されるようになった。これらの変化は、価値の認知と真実性の決定が、単一の評価ではなく、見解や考え方が時間とともに変化することに適応する定期的な再評価に基づいてなされることを求める。

真実性が定期的に評価されることを可能とするプロセスについて、よりよく理解される必要がある。

3 多様な関係者の参画

奈良文書は、文化遺産に対する責任を、それをつくりあげた、もしくは、それを保護している特定のコミュニティに割り当てている。過去20年間の経験は、文化遺産が、1994年には存在せず、仮想空間において形成されるグローバルコミュニティを含む、より幅広いコミュニティや関係するグループにとって様々なかたちで重要な意味を持ち得ることを示した。この状況は、個人が同時に一つ以上のコミュニティのメンバーになり得ること、そして、遺産に関する法律や意思決定の仕組み、さらに経済利益によって決められることが多い関係者間の力の不均衡によって、さらに複雑となっている。遺産の重要性、価値、真実性、管理、活用を確立あるいは認識する力を有する人々は、発言力をほとんどもしくは全く有していないコミュニティの人々を忘れることなく、これらのプロセスにおけるすべての関係者を巻き込む責任がある。遺産の専門家は、遺産に関わっており、遺産に影響を与える可能性を持つコミュニティに注意を払うべきである。

権利、責任、代表者やコミュニティの参加度合いを識別する手法についての、さらなる検討が必要である。

4 相反する主張と解釈

奈良文書は、文化的価値どうしが相反するような場合に、文化の多様性を尊重することを求めている。過去20年間に、遺産の競合する価値や意味は、おそらく解決不可能な対立に発展するかもしれないことが明らかになった。このような状況に対処するために、遺産にかかる議論を調停する信頼性・透明性があるプロセスが必要である。これらのプロセスは、その重要性について共有理解に達しないときであっても、対立するコミュニティが同意の上遺産の保護に参加することを求める。

合意形成の方法を遺産の実践に適用するために、さらなる検討が必要である。

5 持続可能な開発における文化遺産の役割

奈良文書は文化と開発の課題に具体的には言及していない。しかし、過去20年間に、持続可能な開発や貧困を減らすための戦略において文化遺産を考慮する必要性が広く認められるようになった。開発戦略における文化遺産の活用にあたっては、社会経済的利益の配分への公平な参加を確保しながら、文化的価値、プロセス、コミュニティの懸念、そして行政上の手続に考慮しなければならない。文化遺産の保護と経済開発の間の利益の相反関係は、持続性の概念の一部と見なされなければならない。

文化遺産が文化遺産の持続可能な開発のために果たす役割を探り、文化的価値とコミュニティの懸念がすべての開発プロセスに統合されるように、相反する利益関係に係る評価や相乗効果の創出の方法を特定するためのさらなる検討が求められる。

本文書の趣旨に即して、本文書で使用されているキーワードについて、以下の様な解釈を行った。

真実性：文化的価値を伝達する、進化する文化的伝統の意義深い現れと認識される、あるいは人々にグループのアイデンティティと社会的・感情的な共鳴を想起させる遺産の場所、風習、対象に伴う文化的なあり得べき性質。

保護：遺産あるいはその部分を理解し、知り、その歴史と意義を熟考することを意図した全ての行動。現代の我々と次世代に最善の形で遺産の価値を継承するために、保護を促進し、変化を管理すること。

コミュニティ：文化的あるいは社会的特質及び関心を共有し、時を超えた連続性を有すると認識され、他の集団から幾ばくかの観点で峻別されるような、あらゆるグループ。他のコミュニティとの違いを示す特質、関心、要求及び認識の一部は、遺産に直接的に関係する。

文化的価値：様々なコミュニティによって彼らが遺産と考えられている場所またはものに起因する意義、機能、利益。文化的重要性を生み出すもの。

情報源：文化遺産の特性、意味、継承及びその集合的記憶を理解し受容することを可能にする、身体的、文字化されたもの、口伝、あるいは造形的な源泉。

利害関係者：遺産への特別な結びつき、遺産の意義、あるいは法的・経済的関心を基にした特定の関心を有する個人、集団、組織。遺産に関する意志決定に影響を及ぼす、あるいはそれによって影響を被る者。

「奈良+20」は、英語で起草され、2014年10月22日から24日にかけて、日本の奈良において、文化庁（日本政府）、奈良県、奈良市の招待により開催された奈良文書20周年記念会合の参加者により採択された。